
いつかまた会おう～黒の組織～

yuria

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつかまた会おう〜黒の組織〜

【コード】

N9364G

【作者名】

yuria

【あらすじ】

何気ない日々がある日を境に、危険な日々が変わっていく。 初投稿です

プロローグ（前書き）

初投稿なので駄文・駄作ですが、読んでくださると嬉
しいです！

プロローグ

ここは・・・倉庫？

「見つけたぜ、江戸川コナン・・・いや、工藤新一」

「ジン!!」

「やっと会えたな・・・待ってたぜ、お前の死に顔を見るためにな」

そういつてジンはコナンを嘲笑うかのように、拳銃をコナンに突きつけた。

ガバッ

「ハア・・・ハア・・・ゆ、夢？はぁー」

コナンは布団から飛び起きると、深くため息をついた。

（何だか嫌な予感がする、まさか、な・・・）

コナンは少し気になったが、そのまま眠った。

プロローグ（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました！評価・感想を下さると嬉しいです！

第1話 予感（前書き）

すみません・・・今まで投稿できなくて。まあ色々とありまして。
では、読んでくださると嬉しいです！

第1話 予感

7時。

カーテンの隙間から朝の日差しが入り込む。

「コナン君、起きてー」

「ふぁーい」

(寝みー昨日はあんな夢見ちまうし・・・)

コナンはそう言いながらも布団から起きて、学校に行く準備をしていた。

「行ってきまーす」

コナンと蘭は元気良く家を出た。

「あ、コナン君おはよー!」

「おはようございます、コナン君!」

「おはよう、コナン!」

歩美、光彦、元太の三人は元気良く挨拶をした。

「おはよう・・・」

「クスッ」

コナンの隣で灰原 哀は、鼻で笑った。

「あんだよ、灰原」

「相変わらず眠そうね、また推理小説でも読んでたのかしら？」

「ちげーよ、昨日奴らが夢に出てきたんだ」

「奴ら、つてまさか・・・」

灰原は目を見開いて驚いていた。

「ああ、ジンの事だよ」

「そう・・・何もおきなきやいいけど」

灰原は俯きながら言った。

「・・・そうだな」

コナンは嫌な予感がしていた。

「コナン君ー！」

「早くしろよ！」

「遅刻してしまいますよ！」

そう言って歩美達はコナンと灰原に手招きをした。

「わかってるって！」

コナンと灰原は歩美達がいる所まで、走って行った。

「そういえば、昨日のサッカーの試合、みたかよ！」

「ああ、昨日のやつな！」

「すごかったですよね！」

コナン達はサッカーの話で盛り上がっていた。

だが、こんな何気ない会話がもう出来なくなるなんて、この時は誰も想像出来なかった。

第1話 予感（後書き）

前書きにも書いたように、色々ありまして。

体育会だとか、中間テストなどがあって・・・（行事め！！）

ここまで読んでくださり、ありがとうございます！

第2話 手紙（前書き）

どうもYurriaです！

遅くなってすみません（汗）

後書きの前半にお知らせ（？）があるので、見てください。

読んでくださったら嬉しいです！

第2話 手紙

「ただいまーって誰もいねーじゃねーか、
そっぴや蘭は部活で遅くなるって言ってたな、おっちゃんはマージ
ヤンだっけ」

コナンは今小学校から帰ってきたところだ。

「小説でも読むか」

コナンがふとドアの下の方を見ると、
黒い封筒が置いてあり、『江戸川 コナン様』

「何だ？」

コナンはその封筒を取って、中にある黒い紙を取り出した。

「！」

紙にはこう書かれていた。

工藤 新一

日出づる処、没する処の間。

逆らえば、（死）

一鳥 カラス

「一鳥 カラス ってことは、奴らか!？」

コナンは目を見開いて、驚きながらも推理を始めた。

（日出づる処はそのままの意味で、東の方角だな
じゃあ、日没する処は西だな）

コナンは紙を持ったまま、
あごに手をそえいつものポーズで考えていた。

（でも東と西の間って、何処なんだ？）

そこに電話がかかって来た。

ピッ

「もしもし」

「あ、工藤君？」

「灰原？」

電話の相手は灰原だった。

「い、急いで博士の家に来てくれない？」

灰原はとても焦っているのか、早口で言った。

「わ、分かった」

そう言うと毛利探偵事務所から、あの紙を持って走っていった。

~~~~~

コナンは博士の家にいる。

「何だよ灰原急に呼び出したりなんかして」

「手紙よ、彼らからの」

「お前のところにも来たのか」

「えっ、工藤君のところにもきたの？」

「ああ、これだ」

そういつてあの手紙を出した。

「じゃあ私の所にきた手紙も出すわ」

灰原も手紙を出した。

内容はこうだった。

---

S h e r r y

町4丁目2番地、森の中

満月の日に

逆らえば（死）

鳥

「！これって・・・」

コナンは自分の所に届いた手紙を見た。

「どうしたのよ」

「なるほど、そついうことが」

コナンは口の端を上げて笑った。

## 第2話 手紙（後書き）

お知らせというのは、

最新が1週間に1回しかできないということですよ。

こんな自分勝手な作者ですが、応援してくださいましたら嬉しいです！

---

・・・すみません、とっても下手ですね。

もっと上手くなるように、がんばります！

次回からコナンなどの人達と、トークなどをします！  
ここまで読んでくださってありがとうございます！  
感想・評価よろしく願います！

### 第3話 理解と連絡（前書き）

どうもYurriaです。

すみません。前回の後書きに「1週間に1回は最新します」などと書いておきながら、約4週間もほったらかしてしまいました。

中1になって、この1ヶ月間がとても忙しかったんです。これからはもう少しがんばります。

こんな駄目でマイペースな作者ですが、これからも応援してくださいと嬉しいです。

### 第3話 理解と連絡

「何が、そういう事か、なのよ」  
「分かったぜ、奴らのアジトが」

コナンは得意げな笑みを見せた。

「本当に？」

「ああ、まず俺のところに来た手紙の意味は、

『東と西』で、

灰原の所に来た手紙の意味と合わせると……」

「満月の日に 町4丁目2番地の

東と西の間のビルに來い、ってことね」

灰原はコナンが言おうとしている時に灰原は口を挟んだ。

「正解。

にしても、奴らにしては簡単すぎねーか？この暗号」

「そうね……」

「でも奴らのアジトも分かったし、よしとするか」

そう言っつてコナンは立ち上がった。

「言っつくけど、一人で彼らのアジトに侵入しよう、  
なんて思ってるんじゃないでしょうね」

「灰原お前、もしかして心配してくれてんのか？」

「ち、違っつわよ……そんなことであなたに死なれたりしたら、  
蘭さんに会わせる顔がないから……」

灰原は少し赤くなった顔を隠すようにコナンから顔を背けた

「そうだな、じゃあジョディ先生に電話でもするか」

「それがいいわね」

トゥルルル トゥルルル

ガチャ

「あ、もしもし僕だけど」

「oh~cool kid!どうしたんですか」

「実は黒の組織のアジトが分かったんだ」

「本当に?」

ジョディはさっきまでのテンションとは違い、真剣な声で聞き返した。

「うん、じゃあ今から博士の家に来て。詳しい事は、後で話すからあと赤井さんとジエイムズさんも連れて来てくれる?」

「分かったわ」

ピッ

### 第3話 理解と連絡（後書き）

名探偵コナントーク！No.1

Y「さあ、始めました！」

コ「それはいいけど、お前今度からちゃんと更新しろよな」

Y「はい・・・反省してます」

コ「それならいい。」

感想・評価よろしくな！」

## 第4話 作戦

「それで、どうだったの」

「来てくれるみたいだぜ」

「そう・・・」

電話をし終わったコナンの返事を聞いて、  
灰原は少し安心したようだった。

（20分後）

ピンポーン

「はい」

ガチャ

「Hi！二人を連れて来たわよ」

「ありがとう、じゃあ中に入って」

ジヨデイ、赤井、ジエイムズはコナンにすすめられ、  
博士の家に入り、ソファアに座った。

「それで、どうして組織のアジトが分かったの？」

「うん、あのね・・・」

コナンは今までの事を話した。

「手紙か」

「しかも、『満月の夜に』だと」  
「不吉ね」

ジヨディ達はコナンの話を聞いて思ったことを言っていた。

「満月の夜っていつたら、1週間後だね」

「本当ね」

「それじゃあ早速、作戦を立てましょう」

そう言つてジヨディは米花町の地図をテーブルの上に広げた。

「彼らからの手紙にかいてあったビルはこの場所よ」

「では作戦は、A班はビルの入り口から入らせて、約30分後に  
B班の私達4人と、捜査官4、5人ほどを連れて行こう」

ジエイムズは作戦を話した後にコナンと赤井に目配せをした。

「そうだね」

「そうだな」

二人は頷きながら返事をした。

「作戦を壊すようじゃ悪いんだけど、その作戦、簡単過ぎない?」

灰原は人数分のお茶を持ってきながら言った。

「いや、それぐらい簡単でいいんだ」

「あまり細かく決めすぎても、ややこしくなるだけだし」

(・・・今まで彼らと関つて危険な目に遭つてきても、まだ分からないのかしら)

灰原は心配そうな目で見ていた。

「それじゃ、1週間後に朝迎えに来るから」

ジョディはそう言つと二人を連れて帰つていった。

「工藤君はどうするの」

「俺はもう少しここにいろよ」

「そう」

二人はそれぞれ本を読んだりしていた。

ピンポーン

「俺が出るよ。(つつたく、誰なんだ?こんな時に)」

そう思いながらも、コナンはドアを開けた。

するとそこには。

「よー工藤、元気にしとつたか?」

## 第4話 作戦（後書き）

どうもYuriaです！

今から、重大発表（？）をします！！  
それは、

この小説の続編ができたことです！

現在 黒の組織編

次 APTX4869編（どんなのが分かりますか？）

という感じです！

なので、タイトルも少し変えさせていただきました。

これからも、評価・感想共々、応援もよろしくお願いします！！

## 第5話 西からの訪問者（前書き）

更新遅れて、すみません（汗）

「長い間」を投稿してから、パソコンが壊れてしまいました・・・

では、本文をどうぞ！！

## 第5話 西からの訪問者

「よー工藤、元気にしとったか？」

「は、服部！お前何しに来たんだよ」

「何って、工藤に会いに来たに決まっとするやないか」

そう言うと平次はおかまいなしに、ずかずかと中へ入っていった。

「お、おい！！たく・・・」

「あの小っさい姉ちゃん和阿笠のじいさんはどこや」

「灰原は地下室で、博士はジョギングに行ってるよ」

「さよか。まあ、あの腹直さんとな」

（お前はアポなしで来るのを直せよな）

コナンは呆れながら思った。

「ん？なんや、この手紙」

平次はテーブルの上の、あの黒い手紙を見た。

「お前あいつらに正体バレとるやないか！！」

「あ、それは・・・」

「なんで俺に言ってくれへんねん！！」

「俺も今日見たんだよ！だからFBIの人達に見せて作戦立てたんだ」

コナンは今までのいきさつを短く話した。

「・・・それなら俺も協力させてもらうぞ」

「だめだ」

平次の言葉にコナンがすぐに答えた。

「何でや!?!」

「お前には関係ねえだろ?」

「関係ないやろ!?!俺は・・・俺はお前の親友ライバルなんやで?」  
「服部・・・」

コナンは平次の強い視線から目を逸らした。

「なあ・・・工藤」

「わ、分かったよ」

コナンは少し照れながら、了解した。

「それじゃ、ジヨディ先生に知らせなきゃな・・・」

「工藤お前、めんどくさいって顔してるで」

平次は腕を組んでコナンを見下ろした。

「お前が急に協力するなんて言うから・・・」

「なんやと〜!?!了解したんは工藤やる!?!」

「だ〜!?!うっせーな!?!お前は静かにできねーのかよ!?!」

この言い合いは30分も続いたのであった。



## 第5話 西からの訪問者（後書き）

改めまして、yuriaです!!

学生の方はもう夏休みですね！（二学期制の方は違いましたね）  
お仕事をされてる方はがんばってくださいね！

私は宿題、全然やってません・・・（ヤバイ!!）

午前中は部活だし、（吹奏楽部でパーカッションです）  
帰ってきたらもう、フラフラですよ・・・

あ、小説は書きますよ？紙にですけどね。

おっと、無駄話は終わりにして、今日はここまで。（今日は?）

最近、評価・感想が来ないので、くださると嬉しいです!!

## 第6話 お喋りと盗聴（前書き）

すみません、だんだんマイペースになってきてますね（汗）  
更新遅かった上に、少し短いです・・・

## 第6話 お喋りと盗聴

「ったく・・・しつげーんだよ、ハア、お、お前は・・・」  
「それは、ハア、工藤もやる・・・」

30分ものの激しい言い合いの末、二人は息を切らして言った。

「ってか、お前あの人は、どうした？」

「あの人って、ああ、和葉のことかいな、あいつは毛利の姉ちゃん  
とこや」

「ちよっと、あなた達さつきからうるさいわよ」

と、その時哀が地下室から出てきながら言った。

「こんな時によく言い合いなんか出来るわね・・・一週間後には彼  
らと戦わないといけないのよ？」

「そうだったな・・・あ、もう帰んねーと、蘭に怒られる」

「俺はここに泊まらしてもらっつで」

「服は？」

「ちやーんとここに入っつるで」

哀がそう聞くと、自分の持っているバックを叩いて言った。

「それならいいけど・・・。工藤君、気をつけて帰りなさいよ」

前半は平次に、後半の言葉はコナンに言った。

「わーってるよ、灰原、手紙は持って帰るからな」

そう言つと、ドアを開けて帰っていった。

~~~~~

『それならいいけど……。工藤君、気をつけて帰りなさいよ』

『わーってるよ、灰原、手紙は持って帰るからな』

バタン

「フツ……。こんな時でも、のん気にお喋りか？ 奴も随分落ちぶれたもんだな」

「これで奴の死に顔がもつと見たくなりやしたね、兄貴」

「ああ、そうだな……。まあそれは一週間後にとっておこう、ウオツカ……」

(シエリー、待ってるからな……)

第6話 お喋りと盗聴（後書き）

どうもYuriaです!!

今回のサブタイ、正直なににしようか、というより何も思い浮かばなかったんですね・・・
なので2つくらい単語を入れたらいいかなと、思ったのでこれにしました（つまり適当？）

次はもしかしたら、蘭ちゃん（と和葉ちゃん）が出てくるかもしれない！

感想・評価待ってます!!

では!!

追記 8 / 6

「第2話 手紙」のコナンへの封筒には『江戸川 コナン様』の文を話の都合により、追加しました。

第7話 危機（前書き）

とてつもなく更新が遅れてしまい、申し訳ありませんでした・・・

（滝汗）

これからも、もっと×3がんばるので応援、よろしくお願いします

！！

第7話 危機

「ただいま」

「遅かったじゃない、どこ行ってたの？」

「ちよつと、博士の家に・・・」

「そう、今度からはなるべく早く帰ってくるのよ？」

「はい」

現在、午後7時00分。小学一年生にしては遅すぎる時間だ。

「手を洗ったらリビングに来てね、和葉ちゃんも待ってるから」

「うん、分かった」

~~~~~

ガチャ

「あ、コナン君！久しぶりやな！」

「和葉姉ちゃんも、久しぶりだね」

「じゃあ、コナン君も来たからそろそろ食べようか」

「・・・いただきます」

コナン達が夕飯を食べ終わって、くつろいでいると蘭が何かを思い出したように、

コナンに話しかけた。

「あ、そうだ！コナン君に手紙が来てたよ」

「本当？」

そう言うと蘭はその手紙を渡し、「こう言った。

「でもね、この手紙の送り主の名前がないのよ」

(あて先は、『江戸川 コナン様』か)

そう書かれた封筒を開けてコナンは中の手紙を見た。

「！」

---

工藤 新一 and cool guy

とうとうGin達にもばれてしまったようね、あなたの正体。

ちゃんとSherryもアジトに連れて来るのよ？

検討を祈るわ。 Good Luck

(ベルモットからか！)

「誰？ウ”アームースって」

「ちげーよ、ウ”アームースじゃなくて、ベルモットって読むんだよ」

コナンは思ったことを言っただけで焦っていた。

(ヤバ！！思わず声に出しまった・・・普段はこんなこと言わねーのに！！)

「なんでコナン君がそんなこと分かるの？」

「お前、英語習ったことねーだろ」

「それに、コナン君、小学一年生やる？」

いつものコナンが言いそうにない事を言った事が三人にとって、不自然だったのか、次々と質問をする。

「えっと・・・その・・・」

三人の言葉にコナンは戸惑いながら言葉をさがしていた。



## 第7話 危機（後書き）

改めまして、yuriaです！

私のことを覚えている方はいるのでしょうか・・・  
覚えていてくださった方はありがとうございます！！  
覚えていなかった方は、これからでも覚えてくださると、嬉しいで  
す！！

夏休みは宿題におわれていて更新できませんでした・・・すみませ  
んっ。

さて、次回はコナンの正体が・・・！！

感想・評価・指摘、待ってます！！）>。</（

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9364g/>

---

いつかまた会おう～黒の組織～

2010年10月10日20時27分発行